

Kaufman の 2 次元イジングモデル厳密解の論文を読む その 2

2019.1.10 鈴木 実

2. ELEMENTS OF SPINOR ANALYSIS (スピノール解析の要素)

この論文では、 $2n$ 次元空間のある行列の固有値が 2^n 次元空間の行列の固有値と一定の関係があって、一方を求めれば他方もわかるという関係を示して、それを応用して 2 次元イジングモデルの厳密解を解いている。 $2n$ 次元空間のある行列の固有値を求めるほうが簡単であるので、この難解な固有値問題が解けることになった。この部分がこの論文の肝とすることができる。

こうした $2n$ 次元と 2^n 次元の行列の間関係は、反交換関係を有する行列で見られる。反交換関係を有する行列とは、例えば、2 次元なら Pauli 行列、4 次元なら Dirac 行列がそうした行列である。(一般の場合については、Brauer と Weyl の論文 [1] が示している。) 2 次元イジングモデルで対角化する対象となる演算子がこの Pauli 行列の直積で記述できるため、上の固有値を求める手法が応用できることになった。この論文は正にそこに着目して書かれているのである。

最初に、次のような反交換関係を有する $2n$ 個の量を導入する。

$$\Gamma_k^2 = 1, \quad \Gamma_k \Gamma_l = -\Gamma_l \Gamma_k, \quad (1 \leq k, l \leq 2n) \quad (\text{O-10})$$

これは反交換子 $[A, B]_+ = AB + BA$ を用いると、

$$[\Gamma_k, \Gamma_l]_+ = 2\delta_{k,l} \quad (1)$$

と表すこともできる。このような量は一般に通常の数では表せず、行列で可能となる。

$n = 1$ の場合は、

$$\Gamma_1 = \mathbf{s} = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix} = \sigma_3 \quad (2)$$

$$\Gamma_2 = i\mathbf{sC} = -\begin{pmatrix} 0 & -i \\ i & 0 \end{pmatrix} = -\sigma_2 \quad (3)$$

とすることができる。 Γ_1 と Γ_2 は式 (O-10) を満たすのは明らかである。この行列は Pauli 行列に等しい。¹

Pauli 行列は Γ_1, Γ_2 から導くことができる。実際、

$$\sigma_0 = \mathbf{1} = \Gamma_1^2 = \Gamma_2^2$$

$$\sigma_1 = \mathbf{C} = -i\Gamma_1\Gamma_2$$

$$\sigma_2 = \mathbf{C} = -\Gamma_2$$

$$\sigma_3 = \mathbf{s} = \Gamma_1$$

となる。

¹ Pauli 行列は

$$\sigma_1 = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_2 = \begin{pmatrix} 0 & -i \\ i & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_3 = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$$

である。これは、物理学の分野では $\sigma_x, \sigma_y, \sigma_z$ と表記される。

$n = 2$ の場合は,

$$\Gamma_1 = \mathbf{s} \otimes \mathbf{1} = \sigma_3 \otimes \mathbf{1} = \gamma^0 \quad (4)$$

$$\Gamma_2 = \mathbf{i}\mathbf{s}\mathbf{C} \otimes \mathbf{1} = -\sigma_2 \otimes \mathbf{1} = -\gamma^1\gamma^2\gamma^3 \quad (5)$$

$$\Gamma_3 = \mathbf{C} \otimes \mathbf{s} = \sigma_1 \otimes \sigma_3 = -\mathbf{i}\sigma_2\sigma_3 \otimes \sigma_3 = -(\mathbf{i}\sigma_2 \otimes \sigma_3)(\sigma_3 \otimes \mathbf{1}) = -\gamma^3\gamma^0 \quad (6)$$

$$\Gamma_4 = \mathbf{C} \otimes \mathbf{i}\mathbf{s}\mathbf{C} = \sigma_1 \otimes (-\sigma_2) = (-\mathbf{i}\sigma_2\sigma_3) \otimes (-\sigma_2) = (\mathbf{i}\sigma_2 \otimes \sigma_2)(\sigma_3 \otimes \mathbf{1}) = \gamma^2\gamma^0 \quad (7)$$

とすることができる。s と C は反交換関係が成り立つことに注意すると、 Γ_1 から Γ_4 も同様に反交換関係を満たしていることがわかる。γ はディラック行列である²。Γ_j をディラック行列から導くことができることを示す。

n が任意の場合は、今までの一般化として、

$$\Gamma_{2^{r-1}} \equiv \underbrace{\mathbf{C} \otimes \mathbf{C} \otimes \cdots \otimes \mathbf{C}}_{r-1} \otimes \underbrace{\mathbf{s} \otimes \mathbf{1} \otimes \mathbf{1} \cdots \otimes \mathbf{1}}_n \equiv \mathbf{P}_r \quad (\text{O-11-1})$$

$$\Gamma_{2^r} \equiv \underbrace{\mathbf{C} \otimes \mathbf{C} \otimes \cdots \otimes \mathbf{C}}_{r-1} \otimes \underbrace{\mathbf{i}\mathbf{s}\mathbf{C} \otimes \mathbf{1} \otimes \mathbf{1} \cdots \otimes \mathbf{1}}_n \equiv \mathbf{Q}_r \quad (\text{O-11-2})$$

$$\mathbf{s}_r = \underbrace{\mathbf{1} \otimes \cdots \otimes \mathbf{1}}_{r-1} \otimes \mathbf{s} \otimes \mathbf{1} \otimes \cdots \otimes \mathbf{1} \quad (\text{O-5-1})$$

$$\mathbf{C}_r = \underbrace{\mathbf{1} \otimes \cdots \otimes \mathbf{1}}_{r-1} \otimes \mathbf{C} \otimes \mathbf{1} \otimes \cdots \otimes \mathbf{1} \quad (\text{O-5-2})$$

と定義することができる。それぞれ、直積の r 番目に s と $\mathbf{i}\mathbf{s}\mathbf{C}$ が入る。sC = -Cs であるから、虚数単位 i が入っているのは式 (O-10) の反交換関係を満たすためである。これらの行列は 2 次正方行列の n 個の直積であるから 2^n 次正方行列となる。

行列はその成分をベクトルの成分とみなすこともできる。したがって、上の行列の成分は $(2^n)^2$ 個あるので、式 (O-11) の行列は 2^{2n} 次元空間のベクトルでもある。Γ_k は $2n$ 個あり、 $2n$ 個の独立なベクトルである³。

複数の Γ_k の積を作ることにより 2^{2n} 個の独立なベクトルを作ることができる。このような相異なる Γ_k の積の作り方としては、Γ₁, …, Γ_{2n} のうち、それぞれが積に含まれるか否かという違いの組み合わせの数だけ

² ディラック行列は、定義が複数あるようだが、ここでは、

$$\gamma^1 = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & -1 & 0 & 0 \\ -1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad \gamma^2 = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & -\mathbf{i} \\ 0 & 0 & \mathbf{i} & 0 \\ 0 & \mathbf{i} & 0 & 0 \\ -\mathbf{i} & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad \gamma^3 = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & -1 \\ -1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad \gamma^0 = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & -1 \end{pmatrix},$$

である。あるいは、

$$\gamma^j = \mathbf{i}\sigma_2 \otimes \sigma_j \quad (j = 1, 2, 3), \quad \gamma^0 = \sigma_3 \otimes \mathbf{1},$$

すなわち、

$$\gamma^1 = \begin{pmatrix} 0 & \sigma_1 \\ -\sigma_1 & 0 \end{pmatrix}, \quad \gamma^2 = \begin{pmatrix} 0 & \sigma_2 \\ -\sigma_2 & 0 \end{pmatrix}, \quad \gamma^3 = \begin{pmatrix} 0 & \sigma_3 \\ -\sigma_3 & 0 \end{pmatrix}, \quad \gamma^0 = \begin{pmatrix} \mathbf{1} & 0 \\ 0 & -\mathbf{1} \end{pmatrix},$$

とも書ける。

³ 実際、Γ_{2^{r-1}}, Γ_{2^r} の直積の r 番目の因子に現れる行列は、

$$\mathbf{i} \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$$

で、Γ_{2^{r-1}}, Γ_{2^r} 以外の Γ_k の直積の r 番目の因子

$$\begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

の 1 次結合では表すことができない。

作ることができる。あるいは、積の中に含まれない Γ_k の組み合わせを考えても同じである。したがって、その種類は 2^{2n} 存在する。具体的には、論文にあるように、

$$1, \Gamma_1, \Gamma_2, \dots, \Gamma_{2n}, \Gamma_1\Gamma_2, \Gamma_1\Gamma_3, \dots, \Gamma_1\Gamma_2\Gamma_3, \dots \quad (8)$$

のようになる。これらのベクトルは1次独立である⁴。

\mathbf{V}_1 と \mathbf{V}_2 も 2^n 次正方行列であるから、 2^{2n} 次元ベクトルとみなすことができるので、式 (8) のベクトルを用いて表すことができる。実際、これを見てみよう。

式 (O-11) から、

$$\begin{aligned} \mathbf{P}_r \mathbf{Q}_r &= \mathbf{C}^2 \otimes \mathbf{C}^2 \otimes \dots \otimes \text{sis} \mathbf{C} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1} \\ &= \mathbf{1} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \text{is}^2 \mathbf{C} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1} \\ &= \mathbf{1} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes i \mathbf{C} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1} \\ &= i \mathbf{C}_r \end{aligned} \quad (9)$$

となる。したがって、

$$\mathbf{C}_r = -i \mathbf{P}_r \mathbf{Q}_r \quad (10)$$

となる。これから、式 (O-8) (その1) [2] に代入すると、

$$\begin{aligned} \mathbf{V}_1 &= \exp(H^* \sum_{r=1}^n \mathbf{C}_r) = \exp(-iH^* \sum_{r=1}^n \mathbf{P}_r \mathbf{Q}_r) \\ &= \prod_{r=1}^n \exp(-iH^* \mathbf{P}_r \mathbf{Q}_r) \end{aligned} \quad (O-13)$$

となる。(この式の指数部の符号は論文の式と違う。この節は符号の誤りが大変多い。式 (10) も論文の式 (O-12) と符号が異なる。しかし、最後の結果は正しい式が得られている。)

次に、 \mathbf{s}_r については、

$$\begin{aligned} \mathbf{C}_1 \mathbf{C}_2 \dots \mathbf{C}_{r-1} \mathbf{P}_r &= \overbrace{\mathbf{C}^2 \otimes \mathbf{C}^2 \otimes \dots \otimes \mathbf{C}^2}^{r-1} \otimes \mathbf{s} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1} \\ &= \overbrace{\mathbf{1} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1}}^{r-1} \otimes \mathbf{s} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1} \\ &= \mathbf{s}_r \end{aligned} \quad (11)$$

という関係が成り立つ。したがって、

$$\begin{aligned} \mathbf{s}_r \mathbf{s}_{r+1} &= (\mathbf{C}_1 \mathbf{C}_2 \dots \mathbf{C}_{r-1} \mathbf{P}_r) (\mathbf{C}_1 \mathbf{C}_2 \dots \mathbf{C}_r \mathbf{P}_{r+1}) \\ &= (\overbrace{\mathbf{C}^2 \otimes \mathbf{C}^2 \otimes \dots \otimes \mathbf{C}^2}^{r-1} \otimes \mathbf{s} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1}) (\overbrace{\mathbf{C}^2 \otimes \mathbf{C}^2 \otimes \dots \otimes \mathbf{C}^2}^r \otimes \mathbf{s} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1}) \\ &= \overbrace{\mathbf{C}^4 \otimes \mathbf{C}^4 \otimes \dots \otimes \mathbf{C}^4}^{r-1} \otimes \mathbf{s} \mathbf{C}^2 \otimes \mathbf{s} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1} \\ &= \overbrace{\mathbf{C}^2 \otimes \mathbf{C}^2 \otimes \dots \otimes \mathbf{C}^2}^{r-1} \otimes \mathbf{s} \mathbf{C}^2 \otimes \mathbf{s} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1} \\ &= (\overbrace{\mathbf{C} \otimes \mathbf{C} \otimes \dots \otimes \mathbf{C}}^{r-1} \otimes \mathbf{s} \mathbf{C} \otimes \mathbf{1} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1}) (\overbrace{\mathbf{C} \otimes \mathbf{C} \otimes \dots \otimes \mathbf{C} \otimes \mathbf{C}}^r \otimes \mathbf{s} \otimes \mathbf{1} \otimes \dots \otimes \mathbf{1}) \\ &= -i \mathbf{Q}_r \mathbf{P}_{r+1} \end{aligned} \quad (12)$$

⁴ 2^{2n} 個のベクトルの中から任意の2個を選ぶと、このベクトルの作り方から、一方に含まれ、一方には含まれないような Γ_k が必ず存在する。ということは、 $\Gamma_1, \Gamma_2, \dots, \Gamma_n$ が1次独立になるのと同じであるからこの2つのベクトルは独立である。したがって、 2^{2n} 個のベクトルは1次独立である。

が成り立つ。これから、

$$\mathbf{s}_r \mathbf{s}_{r+1} = -i \mathbf{Q}_r \mathbf{P}_{r+1} = i \mathbf{P}_{r+1} \mathbf{Q}_r \quad (13)$$

となる。あるいは、以下のようにしても導くことができる。

$$\begin{aligned} \mathbf{s}_r \mathbf{s}_{r+1} &= (\mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_{r-1} \mathbf{P}_r)(\mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_r \mathbf{P}_{r+1}) \\ &= (\mathbf{P}_r \mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_{r-1})(\mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_r \mathbf{P}_{r+1}) \\ &= \mathbf{P}_r \mathbf{C}_1^2 \cdots \mathbf{C}_{r-1}^2 \mathbf{C}_r \mathbf{P}_{r+1} \\ &= \mathbf{P}_r \mathbf{C}_r \mathbf{P}_{r+1} \\ &= -i \mathbf{Q}_r \mathbf{P}_{r+1} = i \mathbf{P}_{r+1} \mathbf{Q}_r \end{aligned} \quad (14)$$

ただし、式 (O-5), (O-11) から得られる $\mathbf{P}_r \mathbf{C}_r = -i \mathbf{Q}_r$ という関係を用いた。この式は $1 \leq r \leq n-1$ の場合に成り立つ。 $r = n$ 場合は、 $\mathbf{s}_{n+1} = \mathbf{s}_1$ であるから、

$$\begin{aligned} \mathbf{s}_n \mathbf{s}_1 &= (\mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_{n-1}) \mathbf{P}_n \mathbf{P}_1 = (\mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_{n-1}) \mathbf{C}_n^2 \mathbf{P}_n \mathbf{P}_1 \\ &= (\mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_n)(-\mathbf{P}_n \mathbf{C}_n) \mathbf{P}_1 \\ &= (\mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_n)(i \mathbf{Q}_n) \mathbf{P}_1 \\ &= -i \mathbf{Q}_n (\mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_n) \mathbf{P}_1 \\ &= i \mathbf{Q}_n \mathbf{P}_1 (\mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_n) \\ &= -i \mathbf{P}_1 \mathbf{Q}_n (\mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_n) \\ &= -i \mathbf{P}_1 \mathbf{Q}_n \mathbf{U} \end{aligned} \quad (15)$$

となる。ただし、 $\mathbf{U} = \mathbf{C}_1 \cdots \mathbf{C}_n$ である。(論文の式の符号は誤っている。) 式 (14), (15), および式 (O-4-1) から、

$$\begin{aligned} \mathbf{V}_2 &= \exp(H' \sum_{r=1}^n \mathbf{s}_r \mathbf{s}_{r+1}) = \exp(iH' \sum_{r=1}^{n-1} \mathbf{P}_{r+1} \mathbf{Q}_r - iH' \mathbf{P}_1 \mathbf{Q}_n \mathbf{U}) \\ &= \prod_{r=1}^{n-1} \exp(iH' \mathbf{P}_{r+1} \mathbf{Q}_r) \exp(-iH' \mathbf{P}_1 \mathbf{Q}_n \mathbf{U}) \end{aligned} \quad (O-14)$$

となる。この式でも指数部の符号が論文と異なる。

さて、 \mathbf{V}_1 と \mathbf{V}_2 が両方共同様の形式で記述できるようになった。 \mathbf{V}_2 の $r = n$ に対応する付加項を除けば、 \mathbf{V}_2 は \mathbf{V}_1 の \mathbf{P}_r を \mathbf{P}_{r+1} に変換することで得られる。このような変換は $2n$ 次元空間の 1 対 1 写像で表される。一方、この変換は、 2^n 次元空間における表現の相似変換で同等に表される。この同等性の証明は後に示す。

An Alternative Realization (もう一つの行列表現)

式 (O-10), あるいは式 (1) の反交換関係は、相似変換しても変わらないから、 Γ_k を正則な 2^n 次正方行列 \mathbf{S} で相似変換した Γ_k^* も同じ反交換関係を満たす。実際、式 (1) から

$$\mathbf{S} \Gamma_l \mathbf{S}^{-1} \mathbf{S} \Gamma_k \mathbf{S}^{-1} + \mathbf{S} \Gamma_k \mathbf{S}^{-1} \mathbf{S} \Gamma_l \mathbf{S}^{-1} = 2\delta_{kl}$$

となり、

$$\Gamma_l^* \Gamma_k^* + \Gamma_k^* \Gamma_l^* = 2\delta_{kl}$$

となるからである. このような Γ_k^* の例として,

$$\Gamma_{2r-1}^* \equiv \underbrace{\mathbf{s} \otimes \mathbf{s} \otimes \cdots \otimes \mathbf{s}}_{r-1} \otimes \underbrace{\mathbf{C} \otimes \mathbf{1} \otimes \mathbf{1} \cdots \otimes \mathbf{1}}_n \equiv \mathbf{P}_r^* \quad (1 \leq k \leq n) \quad (\text{O-15-1})$$

$$\Gamma_{2r}^* \equiv \underbrace{\mathbf{s} \otimes \mathbf{s} \otimes \cdots \otimes \mathbf{s}}_{r-1} \otimes \underbrace{i\mathbf{C}\mathbf{s} \otimes \mathbf{1} \otimes \mathbf{1} \cdots \otimes \mathbf{1}}_n \equiv \mathbf{Q}_r^* \quad (1 \leq k \leq n) \quad (\text{O-15-2})$$

が挙げられる. この Γ_k^* は次の \mathbf{g} を用いて相似変換, すなわち $\Gamma_k^* = \mathbf{g}\Gamma_k\mathbf{g}^{-1}$ として得られる. ここで, \mathbf{g} は,

$$\mathbf{g} = 2^{-n/2}(\mathbf{C} + \mathbf{s}) \otimes (\mathbf{C} + \mathbf{s}) \otimes \cdots \otimes (\mathbf{C} + \mathbf{s}) = \mathbf{g}^{-1} \quad (16)$$

である. この \mathbf{g} は相似変換により \mathbf{s} を \mathbf{C} に, \mathbf{C} を \mathbf{s} に変換する⁵.

このような性質により, 式 (10) に相似変換 \mathbf{g} を施すと,

$$\mathbf{s}_r = -i\mathbf{P}_r^* \mathbf{Q}_r^* \quad (17)$$

となり, これは対角化行列であるから, 式 (O-13) の \mathbf{V}_1 に相似変換 \mathbf{g} を施した

$$\mathbf{g}\mathbf{V}_1\mathbf{g} = \prod_{r=1}^n \exp(-iH^* \mathbf{P}_r^* \mathbf{Q}_r^*) \quad (18)$$

も対角化行列である.

一方, 式 (14) に相似変換 \mathbf{g} を施すと,

$$\mathbf{C}_r \mathbf{C}_{r+1} = i\mathbf{P}_{r+1}^* \mathbf{Q}_r^* \quad (19)$$

となり, これは対角行列ではないので, 式 (O-14) の \mathbf{V}_2 に相似変換 \mathbf{g} を施しても対角行列にはならない.

The Spin-Representation of the Orthogonal Group (直交群とそのスピノールによる表現)

[定理]

Γ_k が行列による表現で, 反交換関係 (O-10) を満たすなら, その相似変換 $\Gamma_k^* = \mathbf{S}\Gamma_k\mathbf{S}^{-1}$ も反交換関係を満たす行列表現である.

一方, その逆も成り立つ. すなわち, Γ_k と Γ_k^* が行列表現で, Γ_k^* が Γ_k からの同型写像で, かつ両方共反交換関係 (O-10) を満たせば, $\Gamma_k^* = \mathbf{S}\Gamma_k\mathbf{S}^{-1}$ となる行列 \mathbf{S} が必ず存在する. もし, 2つの集合が相似変換によって1対1に対応しているとき (自己同型), 2つの集合は等しいと言うことにすれば, 反交換関係 (O-10) を満たす行列表現は1つの表現しか存在しない. その表現は n に依存する.

⁵このことは次のようにして確かめられる.

$$\mathbf{C} + \mathbf{s} = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix}$$

であるので,

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 0 & 2 \end{pmatrix}$$

が成り立つ. つまり, $\frac{1}{2}(\mathbf{C} + \mathbf{s})^2 = \mathbf{1}$ である.

また,

$$(\mathbf{C} + \mathbf{s})\mathbf{C}(\mathbf{C} + \mathbf{s}) = (\mathbf{C} + \mathbf{s})(\mathbf{1} + \mathbf{C}\mathbf{s}) = \mathbf{C} + 2\mathbf{s} + \mathbf{s}\mathbf{C}\mathbf{s} = 2\mathbf{s}$$

である. これから,

$$\mathbf{C} = \frac{1}{4}(\mathbf{C} + \mathbf{s})^2 \mathbf{C} \frac{1}{4}(\mathbf{C} + \mathbf{s})^2 = \frac{1}{2}(\mathbf{C} + \mathbf{s})\mathbf{s} \frac{1}{2}(\mathbf{1} + \mathbf{C}\mathbf{s})$$

となり, $\frac{1}{2}(\mathbf{C} + \mathbf{s})$ は \mathbf{s} を \mathbf{C} に, \mathbf{C} を \mathbf{s} に変換する. したがって, \mathbf{g} は n 個の直積からなる行列の \mathbf{s} を \mathbf{C} に, \mathbf{C} を \mathbf{s} に変換する.

この定理の前段はほぼ自明であるが、逆の証明は、論文にも書いてあるように簡単には済まされず、かなりスペースを使うので付録に記載した。

ここから始まる部分は非常に独創性の高い、興味深い部分である。いわば、この論文の肝である。

Γ_k ($1 \leq k \leq 2n$) が具体的な行列表現であるとき、 Γ_k の線形結合も Γ_k と同じく反交換関係を満たすことを示すことができる。この線形結合を Γ_k^* とすると、これは Γ_k から Γ_k^* への変換である。この変換は $2n$ 個の基底 Γ_k の線形結合であるから、 $2n$ 次元の空間における行列表現で表される。一方、 Γ_k と Γ_k^* を $2n$ 次元空間の行列表現と見た時には、この変換は $2n$ 次元空間における行列の変換として表すことができる。ここに、 $2n$ 次元空間とスピノール表現よる $2n$ 次元空間の関係が生じるのである。以下、この関係を具体的に見ていこう。

Γ_k の線形結合を Γ_k^* とするとき、

$$\Gamma_k^* = \sum_{j=1}^{2n} o_{jk} \Gamma_j, \quad 1 \leq k \leq 2n \quad (\text{O-17})$$

とすることができる。 o_{jk} は転回形数で、一般に複素数である。まず、変換後に $(\Gamma_k^*)^2 = 1$ となる条件を見ていこう。以下の計算の過程で Γ_k^* を展開し、途中 $i < j$ となる項については i と j を交換して総和することにより、

$$\begin{aligned} (\Gamma_k^*)^2 &= \left(\sum_j o_{jk} \Gamma_j \right)^2 \\ &= \sum_{i>j} o_{ik} o_{jk} \Gamma_i \Gamma_j + \sum_{i<j} o_{ik} o_{jk} \Gamma_i \Gamma_j + \sum_{j=1}^{2n} o_{jk}^2 \Gamma_i^2 \\ &= \sum_{i>j} o_{ik} o_{jk} \Gamma_i \Gamma_j + \sum_{j<i} o_{jk} o_{ik} \Gamma_j \Gamma_i + \sum_{j=1}^{2n} o_{jk}^2 \\ &= \sum_{i>j} o_{ik} o_{jk} \Gamma_i \Gamma_j - \sum_{j<i} o_{jk} o_{ik} \Gamma_i \Gamma_j + \sum_{j=1}^{2n} o_{jk}^2 \\ &= \sum_{i>j} (o_{ik} o_{jk} - o_{jk} o_{ik}) \Gamma_i \Gamma_j + \sum_{j=1}^{2n} o_{jk}^2 \\ &= \sum_{j=1}^{2n} o_{jk}^2 \end{aligned} \quad (\text{20})$$

となるから、 $(\Gamma_k^*)^2 = 1$ とするには、

$$\sum_{j=1}^{2n} o_{jk}^2 = 1 \quad (\text{21})$$

でなければならない。

次に、反交換関係を見ていこう。まず、

$$\begin{aligned} \Gamma_k^* \Gamma_l^* &= \sum_{j,i=1}^{2n} o_{jk} o_{il} \Gamma_j \Gamma_i \\ &= \sum_{i \neq j} o_{jk} o_{il} \Gamma_j \Gamma_i + \sum_{j=1}^{2n} o_{jk} o_{jl} \Gamma_j^2 \\ &= \sum_{i \neq j} o_{jk} o_{il} \Gamma_j \Gamma_i + \sum_{j=1}^{2n} o_{jk} o_{jl} \end{aligned} \quad (\text{22})$$

である。同様に、 $\Gamma_l^* \Gamma_k^*$ についても、次の第2式の第1項で i と j を交換して総和することにより、

$$\begin{aligned}
\Gamma_l^* \Gamma_k^* &= \sum_{j,i=1}^{2n} o_{jl} o_{ik} \Gamma_j \Gamma_i \\
&= \sum_{i \neq j} o_{jl} o_{ik} \Gamma_j \Gamma_i + \sum_{j=1}^{2n} o_{jl} o_{jk} \Gamma_j^2 \\
&= \sum_{i \neq j} o_{il} o_{jk} \Gamma_i \Gamma_j + \sum_{j=1}^{2n} o_{jl} o_{jk}
\end{aligned} \tag{23}$$

となる。式(22)と式(23)を辺辺加えて反交換関係式(10)を適用すると、

$$\Gamma_k^* \Gamma_l^* + \Gamma_l^* \Gamma_k^* = \sum_{i \neq j} o_{jk} o_{il} (\Gamma_j \Gamma_i + \Gamma_i \Gamma_j) + 2 \sum_{j=1}^{2n} o_{jk} o_{jl} = 2 \sum_{j=1}^{2n} o_{jk} o_{jl}$$

となる。ここで、 Γ_l^* 、 Γ_k^* が反交換関係式(10)を満たすためには、 $k = l$ のとき、

$$\sum_{j=1}^{2n} o_{jk} o_{jl} = \sum_{j=1}^{2n} o_{jk}^2 = 1, \tag{24}$$

$k \neq l$ のとき、

$$\sum_{j=1}^{2n} o_{jk} o_{jl} = 0 \tag{25}$$

でなければならない。したがって、 Γ_k^* が反交換関係(O-10)を満足する条件をまとめて記述すると、

$$\sum_{j=1}^{2n} o_{jk} o_{jl} = \delta_{kl}, \quad (1 \leq k, l \leq 2n) \tag{O-18}$$

ということになる。

次に、展開係数の o_{jk} について考えてみよう。 o_{jk} は $2n$ 次正方行列の成分を表している。したがって、式(O-18)の左辺はこの行列の転置行列と該行列の積を意味しており、右辺はそれが単位行列になることから、行列 $\{o_{jk}\}$ は直交行列であることがわかる。この行列は一般に $2n$ 次元空間の回転を表しており、成分が実数なら $2n$ 次元ユークリッド空間における回転を表す。

行列 $\{o_{jk}\}$ を \mathbf{o} で表すと、 \mathbf{o} は $2n$ 次の正方行列であり、その変換は、

$$\mathbf{o} : \Gamma_k \rightarrow \Gamma_k^* = \sum_{j=1}^{2n} o_{jk} \Gamma_j, \quad (1 \leq k \leq 2n) \tag{O-19}$$

ということになる。

この操作は5ページに述べた定理の同型写像に相当し、 $2n$ 次元の行列空間の元 Γ_k を同じ空間の元 Γ_k^* に変換するので、両者を相似変換で結びつける $2n$ 次正方行列が必ず存在する。この行列を変換 \mathbf{o} に対応するということから $\mathbf{S}(\mathbf{o})$ と表すと、

$$\Gamma_k^* = \mathbf{S}(\mathbf{o}) \Gamma_k \mathbf{S}(\mathbf{o})^{-1} \quad (1 \leq k \leq 2n) \tag{O-20}$$

となる。

$2n$ 次の直交行列 \mathbf{o} は無数に存在し、任意の2個の積を作れば、明らかにそれも直交行列となり、単位行列、逆行列も当然含まれ、行列の積は結合律を満足するから \mathbf{o} は群を構成する。

一方、 $\mathbf{S}(\mathbf{o})$ は 2^n 次元スピノール空間における \mathbf{o} の表現であるから、 \mathbf{o} の演算に対応して、 $\mathbf{S}(\mathbf{o})$ も同様の演算が可能である。つまり、回転 \mathbf{o} の後に回転 \mathbf{o}' を施したとすると、それは回転 $\mathbf{o}'' = \mathbf{o}'\mathbf{o}$ に等しく、それに対応して、

$$\mathbf{S}(\mathbf{o}'') = \mathbf{S}(\mathbf{o}'\mathbf{o}) = \mathbf{S}(\mathbf{o}')\mathbf{S}(\mathbf{o}) \quad (\text{O-21})$$

となるということである。これが実際にそうなることを見てみよう。

まず、

$$\mathbf{o} : \Gamma_k \rightarrow \sum_{j=1}^{2n} o_{jk} \Gamma_j = \mathbf{S}(\mathbf{o}) \Gamma_k \mathbf{S}(\mathbf{o})^{-1}, \quad (26)$$

$$\mathbf{o}' : \Gamma_k \rightarrow \sum_{l=1}^{2n} o'_{lk} \Gamma_l = \mathbf{S}(\mathbf{o}') \Gamma_k \mathbf{S}(\mathbf{o}')^{-1} \quad (27)$$

である。したがって、

$$\begin{aligned} \mathbf{o}'' = \mathbf{o}'\mathbf{o} : \Gamma_k &\rightarrow \sum_{j=1}^{2n} o_{jk} \left(\sum_{l=1}^{2n} o'_{lj} \Gamma_l \right) \\ &= \sum_{j=1}^{2n} \sum_{l=1}^{2n} o_{jk} o'_{lj} \Gamma_l = \sum_{l=1}^{2n} o''_{lk} \Gamma_l = \mathbf{S}(\mathbf{o}'') \Gamma_k \mathbf{S}(\mathbf{o}'')^{-1} \end{aligned} \quad (28)$$

とすることができる。ここで、 $\sum_{l=1}^{2n} o_{jk} o'_{lj}$ の部分は ${}^t\mathbf{o}'\mathbf{o} = {}^t(\mathbf{o}'\mathbf{o})$ の (k, l) 成分を意味している。 ${}^t\mathbf{o}$ は \mathbf{o} の転置行列である。これは、式 (O-19) でも、 Γ_k^* は転置行列 ${}^t\mathbf{o}$ を用いて Γ_k による展開をしていることと符合している。

一方、 \mathbf{o}'' のスピノール表現 $\mathbf{S}(\mathbf{o}'')$ に関しては

$$\begin{aligned} \mathbf{o}'' = \mathbf{o}'\mathbf{o} : \Gamma_k &\rightarrow \mathbf{S}(\mathbf{o}') [\mathbf{S}(\mathbf{o}) \Gamma_k \mathbf{S}(\mathbf{o})^{-1}] \mathbf{S}(\mathbf{o}')^{-1} \\ &= [\mathbf{S}(\mathbf{o}') \mathbf{S}(\mathbf{o})] \Gamma_k [\mathbf{S}(\mathbf{o})^{-1} \mathbf{S}(\mathbf{o}')^{-1}] \\ &= (\mathbf{S}(\mathbf{o}') \mathbf{S}(\mathbf{o})) \Gamma_k (\mathbf{S}(\mathbf{o}') \mathbf{S}(\mathbf{o}))^{-1} \end{aligned} \quad (29)$$

となるから、確かに、

$$\mathbf{S}(\mathbf{o}'') = \mathbf{S}(\mathbf{o}'\mathbf{o}) = \mathbf{S}(\mathbf{o}')\mathbf{S}(\mathbf{o}) \quad (\text{O-21})$$

となっていることがわかる。

以上のことから、 $2n$ 次元空間の回転を表す行列が 2^n 次元空間の行列に 1 対 1 対応していることがわかる。たとえば、 $\mathbf{P}_r \rightarrow \mathbf{P}_{r+1}$ 、 $\mathbf{Q}_r \rightarrow \mathbf{Q}_r$ という変換も $2n$ 次元空間の回転とみなすことができるから、これに対応する 2^n 次元空間の行列 \mathbf{S} が存在する。すなわち、

$$\mathbf{P}_{r+1} = \mathbf{S} \mathbf{P}_r \mathbf{S}^{-1}, \quad \mathbf{Q}_r = \mathbf{S} \mathbf{Q}_r \mathbf{S}^{-1} \quad (30)$$

となるので、 \mathbf{P}_r と \mathbf{Q}_r で展開できる \mathbf{V}_1 にこの相似変換を施すと $\mathbf{P}_r \rightarrow \mathbf{P}_{r+1}$ 、 $\mathbf{Q}_r \rightarrow \mathbf{Q}_r$ となって、 \mathbf{V}_2 の最後の因子を無視すれば $\mathbf{V}_2 = \mathbf{S} \mathbf{V}_1 \mathbf{S}^{-1}$ とすることができる。(以上第 2 節の途中まで)

参考文献

- [1] Richard Brauer and Hermann Weyl, Bruria Kaufman, "Spinors in n dimensions", Am. J. Math. **57**, 425-449 (1935).
- [2] 「Kaufman の 2 次元イジングモデル厳密解の論文を読む その 1」(2019/1/3 のエントリー).
<http://totoha.web.fc2.com/Kaufman.paper1.pdf>

付録

A. 自己同型変換と相似変換の等価性の証明

n 次正方行列からなる環の上の 1 対 1 写像が自己同型であるための条件は 2 つの元を X, Y とし、写像を $*$ で表すと、

$$\begin{aligned}(\lambda X)^* &= \lambda X^* \\(X + Y)^* &= X^* + Y^* \\(XY)^* &= X^* Y^*\end{aligned}\tag{I}$$

を満たすときである。これを満たす時、自己同型であるという。自己同型は相似変換

$$X^* = AXA^{-1}$$

によつてのみ可能である。ただし、 A は正則行列である。

[証明]

最初に、条件 I が成り立つ場合の定理の証明を示す。式 (O-10) の反交換関係が成り立てば、条件 I が成り立つことの証明はその後に示す。

以下は Brauer¹ と Weyl の論文 [1] に記載された内容に補足説明を加えたものである。

G, X が正方行列のとき、

$$GX = \gamma X\tag{A1}$$

が $X = 0$ でない解を持つのは γ が G の固有値である場合である。すなわち、 X の列ベクトルが G の γ に属する固有ベクトルになっている場合である。

自己同型変換を $*$ で表す。式 (A1) に変換 $*$ を施すと、条件 I により、

$$G^* X^* = \gamma X^*\tag{A2}$$

となる。したがって、 G^* も G と同じ固有値を有する。 G の n 個の固有値を $\gamma_1, \gamma_2, \dots, \gamma_n$ とすると、

$$G = \begin{pmatrix} \gamma_1 & & & 0 \\ & \gamma_2 & & \\ & & \ddots & \\ 0 & & & \gamma_n \end{pmatrix}\tag{A3}$$

である。 G^* も同じ固有値を持つので、 G と G^* は相似変換の関係にあり、

$$G^* = AGA^{-1}\tag{A4}$$

となるような正則行列 A が存在する。この A を用いて

$$X^{**} = A^{-1} X^* A\tag{A5}$$

となる X^{**} を定義する。そうすると、これは X から X^{**} への自己同型写像を定義する。これを $**$ で表すことにする。式 (A2) に左から A^{-1} 、右から A を掛けると、

$$(A^{-1} G^* A)(A^{-1} X^* A) = \gamma(A^{-1} X^* A)\tag{A6}$$

となり、したがって、式 (A5) により $**$ 変換になるから、

$$G^{**} X^{**} = \gamma X^{**}\tag{A7}$$

となる。一方、式 (A4) より、 $A^{-1}G^*A = G$ であるから、これを式 (A6) 左辺に代入すると、

$$GX^{**} = \gamma X^{**} \quad (\text{A8})$$

となる。この式を式 (A7) と比較すると、

$$G^{**} = G \quad (\text{A9})$$

となることがわかる。つまり、**変換に関して G は不変であることがわかる。

次に、

$$E(i, k) = i \begin{pmatrix} & & & k \\ & & & \vdots \\ & & & 0 \\ & & & \vdots \\ \cdots & \cdots & 1 & \cdots \\ & & \vdots & \\ 0 & & & 0 \end{pmatrix} \quad (\text{A10})$$

という i 行 k 列の 1 つの成分のみ 1 でそれ以外は 0 である行列を考える。そうすると、

$$GE(i, k) = \gamma_i E(i, k) \quad (\text{A11})$$

$$E(i, k)G = \gamma_k E(i, k) \quad (\text{A12})$$

である。式 (A11) に**変換を施すと、

$$G^{**}E^{**}(i, k) = \gamma_i E^{**}(i, k) \quad (\text{A13})$$

となる。 G^{**} は**変換に不変であるから、

$$GE^{**}(i, k) = \gamma_i E^{**}(i, k) \quad (\text{A14})$$

となる。式 (A11) と式 (A14) を比較すると、 $E(i, k)$ と $E^{**}(i, k)$ は同じ斉次方程式の解であることがわかる。したがって、

$$E^{**}(i, k) = \alpha_{ik} E(i, k) \quad (\text{A15})$$

とおくことができる。

定義から

$$E(i, i)^2 = E(i, i) \quad (\text{A16})$$

である。これに**変換を施すと、

$$(E^{**}(i, i))^2 = E^{**}(i, i) \quad (\text{A17})$$

となる。これに式 (A15) を代入すると、

$$\alpha_{ii}^2 = \alpha_{ii} \quad (\text{A18})$$

となる。 $\alpha_{ii} = 0$ は trivial なので、

$$\alpha_{ii} = 1 \quad (\text{A19})$$

となる。

次に、

$$\alpha_{i1} = \alpha_i, \quad \beta_{1k} = \beta_k \quad (\text{A20})$$

とおく。定義から、

$$E(i, k) = E(i, 1)E(1, k) \quad (\text{A21})$$

と書くことができるから、これを**変換すると、

$$E^{**}(i, k) = E^{**}(i, 1)E^{**}(1, k) \quad (\text{A22})$$

となる。これに式 (A15) を代入すると、

$$\alpha_{ik}E(i, k) = \alpha_i\beta_kE(i, 1) \quad (\text{A23})$$

となり、すなわち、

$$\alpha_{ik} = \alpha_i\beta_k \quad (\text{A24})$$

となる。 $k = i$ とすると、式 (A19) より、

$$\alpha_{ii} = \alpha_i\beta_i = 1 \quad (\text{A25})$$

である。したがって、

$$\alpha_i = \frac{1}{\beta_i} \quad (\text{A26})$$

となる。したがって、式 (A24), (A26) より、

$$\alpha_{ik} = \frac{\alpha_i}{\alpha_k} \quad (\text{A27})$$

となる。

ここで、任意の行列 X を考える。成分は x_{ik} とする。その**変換を X^{**} とする。その成分は x_{ik}^{**} とする。 $E(i, k)$ の定義から、

$$E(k, i)XE(i, k) = x_{ik}E(i, k) \quad (\text{A28})$$

である。これに**変換を施すと、

$$E^{**}(k, i)X^{**}E^{**}(i, k) = x_{ik}E^{**}(i, k) \quad (\text{A29})$$

である。式 (A15) を代入して、

$$\alpha_{ki}E(k, i)X^{**}\alpha_{ik}E(i, k) = x_{ik}\alpha_{ik}E(i, k) \quad (\text{A30})$$

となる。したがって、

$$E(k, i)X^{**}E(i, k) = \alpha_{ki}^{-1}x_{ik}E(i, k) \quad (\text{A31})$$

となる。左辺は式 (A10) の定義から、式 (A28) と同様に、 x_{ik}^{**} であるから、

$$x_{ik}^{**}E(i, k) = \alpha_{ki}^{-1}x_{ik}E(i, k) \quad (\text{A32})$$

となる。したがって、

$$x_{ik}^{**} = \alpha_{ki}^{-1}x_{ik} \quad (\text{A33})$$

である。さらに、式 (A27) から

$$x_{ik}^{**} = \alpha_i x_{ik} \alpha_k^{-1} \quad (\text{A34})$$

となる。ここで、

$$A_0 = \begin{pmatrix} \alpha_1 & & & 0 \\ & \alpha_2 & & \\ & & \ddots & \\ 0 & & & \alpha_n \end{pmatrix} \quad (\text{A35})$$

とすると、式 (A34) は

$$X^{**} = A_0 X A_0^{-1} \quad (\text{A36})$$

と書くことができる。これに、式 (A5) を代入すると、

$$A^{-1}X^*A = A_0XA_0^{-1} \quad (\text{A37})$$

となる。すなわち、

$$X^* = (AA_0)X(AA_0)^{-1} \quad (\text{A38})$$

である。つまり、*変換は相似変換である

(証明終わり)

B. 反交換関係が成立なら条件 I が成り立つことの証明

式 (10) の反交換関係が成り立てば、条件 I が成立することを証明する。

その証明の前に、条件 I の変換 (写像) が環の 0 と単位元に関しては不変であることを示す。0 と 1 を変換したときに、それが 0 または 1 と異なると仮定する。これを、 $\xi \neq 0$, $\eta \neq 0$ として、

$$0^* = 0 + \xi \quad (\text{B1})$$

$$1^* = 1 + \eta \quad (\text{B2})$$

と書くことにする。

$$(X + Y)^* = X^* + Y^* \quad (\text{B3})$$

が成り立つとする。 $X = 0$, $Y = 0$ とすると、式 (B1) から、左辺は $0 + \xi$ となり、一方、右辺は $(0 + \xi) + (0 + \xi) = 0 + 2\xi$ となるから、矛盾する。したがって、式 (B3) は成り立たない。故に、式 (B3) が成り立てば式 (B1) が成り立つ。

次に、

$$(XY)^* = X^*Y^* \quad (\text{B4})$$

が成り立つとする。 $X = 1$, $Y = 1$ とすると、式 (B2) から、左辺は $1 + \eta$ となり、一方、右辺は $(1 + \eta)(1 + \eta) = 1 + 2\eta + \eta^2$ となるから、矛盾する。したがって、式 (B4) は成り立たない。故に、式 (B4) が成り立てば式 (B2) が成り立つ。

以上から、条件 I が成り立てば

$$0^* = 0 \quad (\text{B5})$$

$$1^* = 1 \quad (\text{B6})$$

が成り立つ。今は、条件 I が成り立つことを証明するのであるから、式 (B5), (B6) は成り立つとする。(成り立たないとするのは意味がない。)

$$(\lambda X)^* = \lambda X^* + f \quad (\text{B7})$$

とする。 $X = 1$ とすると、左辺は $\lambda^* = \lambda$, 右辺は $\lambda + f$ であるから、 $f = 0$ でなければならない。つまり、条件 I の第 1 式が成り立つ。

次に、

$$(XY)^* = X^*Y^* + f \quad (\text{B8})$$

としよう。 $Y = 1$ とすると、左辺は X^* , 右辺は $X^* + f$ となり、 $f = 0$ でなければならない。つまり、条件 I の第 3 式が成り立つ。

次に,

$$(X + Y)^* = X^* + Y^* + f \quad (\text{B9})$$

としよう. これを用いると,

$$(XY + YX)^* = (XY)^* + (YX)^* + f = X^*Y^* + Y^*X^* + f \quad (\text{B10})$$

となるが, 式 (O-10) の反交換関係から左辺は 0, 右辺は f となるので, $f = 0$ となる. つまり, 条件 I の第 2 式が成り立つ.

証明の仕方はこの他にも複数あるはずである.

(その 2 終わり)